vol.32 何に使われていた？

# 牛の角芯（かくしん）

■ 出土地：東村跡

これは東村（あがりむら）跡の発掘調査により見つかった牛の角芯です。東村は那覇港の繁栄とともに栄えた商業の中心地と考えられる遺跡です。発掘調査では、中国産を中心とする陶磁器類の他、多くの自然遺物（脊椎（せきつい）動物遺体及び貝類遺体）が見つかりました。この中から今回のまいコレでは、牛の角芯を紹介します。

この角芯の表面をよく観察すると、角の根元部分から角先に向かって、ノミ状の工具を使って削り剥いだような痕跡が確認されます。人々はいったいどのような目的で、このような加工を行ったのでしょうか。

近世の日本では、角芯の周りをとりまく角鞘（つのざや）（爪や毛髪と同じタンパク質の一種であるケラチン質からなる）を切り剥がしたのち、熱を加えて板状の素材に加工し、これをべっ甲の代用品として利用した記録が残っています。

東村跡で見つかった牛の角芯の中には、ウミガメ科の骨（甲板片）と一緒に出土したものもありました。もしかしたら当時の沖縄でも工芸品の素材として、牛の角をべっ甲のように利用したのかもしれません。

〈金城 貴子〉